



夏見台幼稚園・保育園 ニュースレター 2024.2.10 号

園主の鳥居徹也です。夏見台幼稚園・保育園でのこだわりをニュースレターにまとめます。どうぞご覧ください。※配信停止の方はお手数ですがメールまたはお電話でどうぞ(info@treponte.jp まで)

〒273-0866 船橋市夏見台 2-16-1 夏見台幼保園
電話:047-429-7231

子どもが大好きな「積み木」について



毎年1月末に作品展が行われます。1年間を振り返り、「これがいい!」と子どもたちが自ら選んだ作品をホールに展示します。そしてステージ上には、園内にあるすべての積み木を集めて、思い思いの世界を作り上げます。

右上の作品はかなり複雑な構造になっています。何度も崩れて何度もやり直す。黙々と取り組む姿が印象的でした。

積み木遊びには、ある程度の「量」が必要です。子どもの中に、再現したい大きなイメージがあるとします。そこで積み木を始める。しかし積み木の数が足りない。



「もっと積み木ないの?」
「もうそれで全部よ」

じゃあいいよ、とばかりに途中まで組み立てていたものを自ら崩してしまう…そんな話を聞いたことがあります。

だから私たちの園では、少々値は張りますがヨーロッパの高価な積み木をたくさん揃えました。ドイツのフレーベル積み木、フランスのカプラなどです。さきほどの複雑な構造のお城はカプラでできています。

なぜ日本製ではないのかというと、品質の違いです。日本製の安い積み木は、高く積むと崩れてしまうのです。



なかなか豪華なサッカー場です。このような積み木を使った「構造遊び」では、お互いにイメージを共有すること、みんなで協力して積み上げていくことが必要になります。

積み木は純粋に楽しいし、達成感が大きいので大人気なおもちゃです。ただここで、少し理屈っぽいことをいいますと、積み木を「積む」という行為は、「足す」「加算する」そしてさらには、算数の「加法」につながっていきます。

たとえば、「 $2 + 3 = 5$ 」という数式。その中の「+」が意味するものは何か？「+」とは象徴でありシンボルです。

積み木という「モノ」。それを使って積んだり、乗せたりする具体的な行為を置き換えたものが



「+」というシンボルです。

上図にある3段階のピラミッドは、私たちの「思考力の発達」のステップです。まず赤ちゃんは「身体」で考えています。何でも触って認識しようとしします。しかし1年後に言葉を獲得すると、もう触らなくても「モノ」を認識できるようになります。体感的思考から具体的思考に進みます。

最後の抽象的思考（シンボル）。これが学校でのお勉強になります。論理という目に見えないものをイメージできないといけません。

ここで触れたように、積み木を積むという具体的な行為が「+」「加法」という抽象性への橋渡しとなっています。

その逆もあります。

かつてNHKの番組で見たのものです。小学校4年生の算数の授業でした。

「227個のキャラメルを3人で分けるとひとり何個になるでしょうか？」

答えは右のように「 $227 \div 3$ 」で導かれます。ここで先生が発問します。

「なぜこの数式で合っているのか、その理由が説明できますか？」

なかなか腑に落ちる説明ができず困惑する子どもたち。特に227の7が下に降りてくるところが分からないと。

そこで担任の先生が、本物のキャラメルを取り出しました。10個入りのキャラメル22箱と7つのバラになったキャラメルです。

子どもたちは実際のモノに触れ、数えて分けて、割り算（除法）というシンボルが象徴している具体物を味わっていました。



本当に理解できたことを「腹に落ちる」と言います。身体感覚でとらえたということです。



この3段階のステップを自由に行き来できることが大切です。難しいことがあったら下がればいいのです。話の上手な人は、適切なたとえ話（具体例）を活用します。抽象的な話ばかりでは飽きてしまうからです。

手を使った遊びは、抽象的思考のレディネス（学習準備性）になっています。あのアインシュタインも、子どものときに発語が遅く心配されましたが、黙々と積み木を積んでいたそうです。子どもたちにはどんどん積み木で遊んでほしいものです。（終）